第 2 回三学部合同実習

3-1 班 潮見地区 実習報告書

＜実習期間＞

2024 年 8 月 19 日(月)～8 月 31 日(土)

＜班員構成＞

メンバー

医学部 4 年 會田凱将

医学部 4 年 大野杏花里

医学部 3 年 倉持裕基

医学部 1 年 樫浦ももこ

薬学部 4 年 坂本麻央

看護医療学部 4 年 小松帆香

看護医療学部 2 年 中島明音

ファシリテーター

看護医療学部 4 年　吉本ひな

目次

1. 事前準備スケジュール 3

2. 事前準備活動 4

2-1. 地区診断ワークショップ 4
2-2. 事前調べ学習の情報共有 5
2-3. 潮見友の会の方々とのオンラインミーティング 5
2-4. 仮設の検討・決定 5
2-5. 各教育機関・インタビュー先への質問項目の決定 6
2-6. 現地実習前 最終ミーティング 6

3. 実習行程表 7

4. 稚内市での活動 8

4-1. 市長表敬訪問 8
4-2. 今村光壹様 FM わっぴ～ 8
4-3. 潮見小中校長懇談 10
4-4. 中澤和一様 11
4-5. 産婦人科・國枝院長 12
4-6. 育英館大学職員 侘美様 12
4-7. クリニックはぐ.....14
4-8. 稚内市役所 企画調整課 15
4-9. 富岡幼稚園 16
4-10. 稚内市立病院（循環器内科・泌尿器科・研修医）.....18
4-11. 稚内高等学校 衛生看護科生との懇談 19
4-12. 山田繁春様 20
4-13. 稚内大谷高等学校 21

5. フィールドワークを通しての学び 23

6. アクションプランのご提案.....25

6-1. 前書き 25
6-2. 具体的なアクションプランの内容 26

7. 発表会資料 32

8. コラム.....36
8-1. 稚内市観光 36
8-2. ひかり町内会『夏まつり』.....36
8-3. 少年自然の家でのくらし etc 37
8-4. 潮見が丘小学校での交流授業.....37
9. 各参加者の学び 38
10. ご協力いただいた機関・団体・個人様へ 42

1. 事前準備スケジュール

・6/10(月)　初顔合わせ zoom

・6/21(金)　4 グループ合同 zoom （昨年度の実習内容や地区診断の流れについて）

・6/28(金)　地区診断ワークショップ

・7/4(木)　　事前調べ学習の情報共有

・7/13(土)　初対面会議、潮見地区現地の方とのミーティング

・7/26(金)　仮説の検討・決定

・7/30(火)　各教育機関の教員への質問項目の決定

・8/4(日)　　各インタビュー先への質問項目の決定

・8/15(木)　現地での実習前最終ミーティング

・8/19(月)～現地実習参加

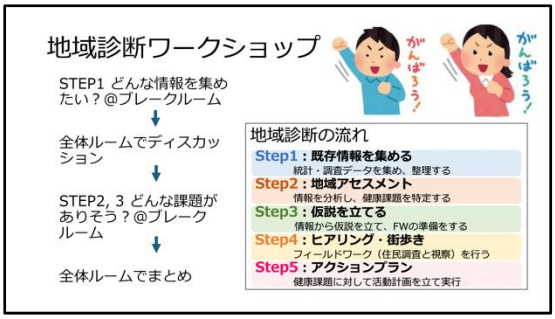
2. 事前準備活動

本実習では、稚内現地での実習に参加する前に情報収集を主としてさまざまな準備活動を実施した。以下、その過程を示す。

2-1.　地区診断ワークショップ

ファシリテーターである吉本ひなさん主催とし、慶應義塾大学医学部・看護医療学部のキャンパスの所在地である『信濃町』をモデルとした地区診断を行った。今回、仮説を立てるのにあたり、コミュニティ・アズ・パートナーモデルを用いて情報収集を行った。コミュニティ・アズ・パートナーモデルは、地域診断を行う際に用いられる手法のひとつである。アセスメントにおいて、地域を構成する住民を中心とし、自然環境、教育、安全と交通、政治および行政、保健及び

福祉サービス、コミュニケーション、経済、レクリエーションの８つの項目で地域について情報整理を行う。ワークショップでは具体的にどのような情報が必要であるか、またどのように収集するか、そしてその集めた情報をどのように組み合わせて仮説を立てていくかを一連の流れに沿って学習した。



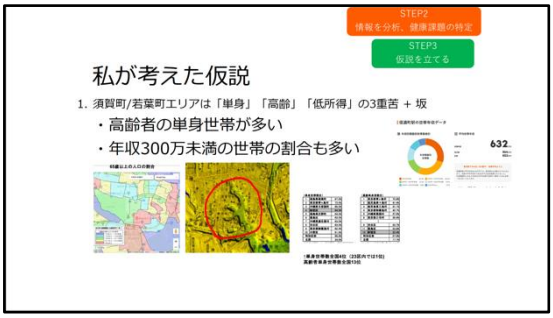
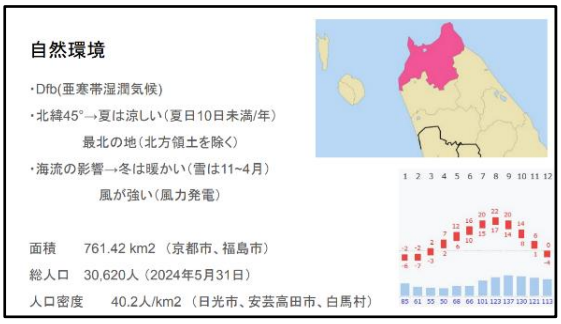


図 1.　地域診断ワークショップで用いられた資料(一部抜粋)

2-2.　事前調べ学習の情報共有

コミュニティ・アズ・パートナーモデルを構成する８つの項目（「物理的環境」「経済」「政治と行政」「教育」「交 通と安全」「コミュニケーション・情報」「レクリエーション」「保健医療と社会福祉」）について、班員内で担当項目を割り振り、それぞれが収集した情報を共有した。(図 2) 共有した情報の中から、潮見地区は”子供の数が多い”という点に着目し、”子育て”や”教育”に焦点を当てて仮説を検討するという方針が定まった。



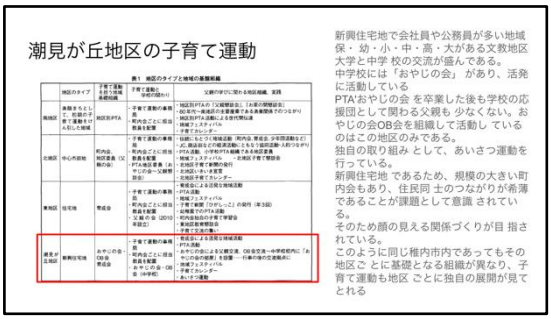


図 2.　情報共有で用いられたスライド(一部抜粋)

2-3.　”潮見友の会”の方々とのオンラインミーティング

飯田さん進行のもと、実際に稚内市在住の”潮見友の会”代表の植木明彦さん、吉田勝徳さんと zoom にてオンラインミーティングを行った。インターネット上から得られる表面的な情報だけでなく、潮見地区に関しての歴史や住民の方々の実状についてなど、より深い話を聞くことができた。また、これまでの事前学習で得られた情報をもとに、こちらからお話を伺いたいと思う方を列挙し、実際にアポイントメントを取ることが可能であるかどうかの話し合いや、飯田さんか

らインタビュー先のご提案を受け、希望するインタビュー先のリストアップを行った。

2-4.　仮説の検討・決定

　コミュニティ・アズ・パートナーモデルに基づいた情報、そして潮見地区現地の方からの情報をもとに検討し、以下の 2 つの仮説を立てた。

仮説①

『稚内市全域と比較して潮見が丘地区に子供が多いのは、小さい頃の子育て支援が充実しているからではないか』

〈根拠〉

・子供の人口が多い

⇒親や祖父母の前の世代が多く、順当に増えたと考えられる

・家系で代々引き継ぐことの多い第 1,2 次産業従事者が少なく、第 3 次産業就業者が多い

⇒新たに移住して暮らし始めた人が多いと考えられる

・幼稚園～大学まで十分に教育機関がそろっている

⇒他地区と比較して教育を重視した子育てをすることができると考えられる

・公園や学習塾などが比較的充実している

⇒他地区に比べて子育てに適した環境であると考えられる

仮説②

『生産年齢の転出などによる人口減少が多いのは、将来を潮見が丘(稚内市)で過ごしたいと思えるようなインセンティブが乏しいからではないか』

〈根拠〉

・買い物や医療サービス環境の不足

⇒”生活する環境”として不便であると考えられる

・交通アクセスの不便さ

⇒進学意欲低下に影響を与えている可能性があると考えられる

・娯楽施設が少ない

⇒市民が他の都市と比較して魅力が少ないと感じている可能性があると考えられる

〈導いた解決策〉

・新たな魅力の発掘が必要

→・若い世代が転出しないような魅力

（子育てや教育に焦点を当てた政策・援助、事業の充実、稚内へ進学・就職したくなるようなインセンティブの確保）

・転入したくなるような魅力

（稚内ブランドの確立・『最北端』というワードの活用など）

2-5.　各教育機関・インタビュー先への質問項目の決定

設定した 2 つの仮説を検証するために、各インタビュー先への質問項目の設定を行った。班員で担当箇所を割り振り、各インタビュー先で得られる情報を推測しながら各々の質問項目を作成した。作成した質問項目については、zoom を活用して共有し、検討・修正したものを各インタビュー先へお渡しした。

2-6.　現地実習前 最終ミーティング

現地での実習前の最終ミーティングとして、班内での認識をすり合わせ、共通認識とするために、これまでに収集した情報、仮説について再度確認・検討した。およそ 2 ヶ月間かけて行ってきた事前準備活動が終了となり、現地実習開始を前に気持ちを引き締めた。

3. 実習行程表

	午前	午後
8/19(月)		・稚内到着 ・ファシリテーターによるアイスブレイク、オリエンテーション ・取材先の日程確認、調整
8/20(火)		・市長表敬訪問 ・今村光壹さんへインタビュー ・フィールドワーク
8/21(水)	・潮見が丘小学校、中学校にてインタビュー ・中澤和一さんへインタビュー	・市立稚内病院にて産婦人科、國枝院長へインタビュー ・歓迎会
8/22(木)	・育英館大学にてインタビュー	・クリニックはぐにてインタビュー
8/23(金)	・市役所企画調整課にてインタビュー	・富岡幼稚園・保育園にてインタビュー ・市立稚内病院にて循環器内科・泌尿器科・研修医の方へインタビュー ・富岡児童福祉センターの方から聞き取り ・稚内高等学校　衛生看護科学生との懇談
8/24(土)	・観光	・観光
8/25(日)	・発表会準備	・ひかり町内会夏祭りへの参加
8/26(月)	・発表会準備	・山田繋春さんへインタビュー
8/27(火)	・潮見が丘小学校にて交流授業	・大谷高校にてインタビュー ・FM わっぴ～にてラジオ出演
8/28(水)	・発表会準備	・発表会準備
8/29(木)	・発表会準備	・発表会準備 ・春田先生と発表に向けたミーティング ・カーリング体験
8/30(金)	・発表会準備	・発表会
8/31(土)	・稚内出発	

4. 稚内市での活動

現地に到着し、２日目以降から各地でインタビューを行った。各訪問先の概要とインタビューを通してのそれぞれの思いや学びについて記載する。

4-1.市長表敬訪問

【概要】　・日時：8/20(水)　13:30~14:00
　　・訪問班員：弊班員含めた全員
　　・内容：
　　・工藤広市長へのご挨拶

【感想/学び】

稚内に到着した翌日に執り行われた工藤市長への表敬訪問は、我々にとって本実習での最初の訪問であった。我々を含め実習参加者全員が集まり、本実習を受け入れてくださった稚内市の方々への感謝を申し上げるとともに、代表者として市長へ質問をさせていただいた。4 つの班それぞれに関連するような質問を考えるのは苦労したが、市を代表した行政的な立場からの市長のお話は大変有意義であり、我々の班への仮説や以降に続く訪問先への質問の軸、さらには最終的なアクションプランのエッセンスとなり、本実習全体を通じて重要な訪問であった。非常に多忙なスケジュールの中で、我々実習学生のために時間を割いてくださった工藤市長を始め、市の職員の方々に感謝申し上げる。

4-2.今村光壹様　FM わっぴ～

【概要】　・日時：8/20(水)　15:00~16:00
　　・訪問班員：會田、大野、倉持、坂本、吉本
　　・内容：
　　・潮見地区における「教育」というものの立ち位置とその変遷
　　・教育機関と地域との連携
　　・潮見地区の人口動態の実態

・広範囲への情報発信
・潮見地区と子育て
・人口増加へのきっかけと構想

【感想/学び】

事前学習の内容より、潮見地区が文教地区としての立ち位置を確立しているという考えから、潮見地区の教育、子育てと地域の関係性を知るため、元潮見地区の子育て連絡協議会会長で FM わっぴ～社長の今村さんにお話を伺った。

今村さん自身の PTA 会長を務めた経験や地域や教職員の方との関係、これまで見てきた人の動きを元にインタビューに答えていただき、私達の班がこの度の地域診断において人口増加を促すために今現在の潮見地区について詳しく教えてくださり、さらに何を手掛かりにしていけばいいのか。地域の方がどう感じているのか。についてもご教授いただいた。

まずは、教育,子育てに関して。潮見地区では教職員が子供を見守る体制ができており、さらには地域全体として子供達を見守る社会の形成ができていると感じた。一方で子育てというものに対しての向き合い方は、(これは稚内に限ったものではないが)家庭によって二分され、そのうち子育てにひいては子供に熱意をあまり持たない家庭の子供達に対しての厚いサポートシステムができている事例をご紹介していただいた。文教地区として作り上げる形の理想は家庭の意識自体を変えることなのだと感じた。

40 年ほど前からの潮見地区を辿ることでなぜ教育と子育てを軸にした地域が出来上がってきたのかを知ることができたとともに、今現在ある緻密な連携による文教地区の強みを認識できた。しかしながら、どれだけ体制が整備されようとも稚内全体としてみても潮見地区としても人口減少という大きな問題が横たわっていること、多くの人がそれを問題点と思っていることに気づかされた。

この問題点に関して、広い情報発信に早い段階から着目しラジオ局を運営し始めた今村さんの貴重なご意見が聞けたことは、私達の地域診断において目指すべき最終的なゴールとそのための方法の考案に大きく役立った。

1.若い世代が外を経験して帰ってくる。2.若い世代が外から入ってくる。この 2 点において”囲い込まない人口増加”という観点を知るとともに、今潮見地区ひいては稚内にある魅力が発信されるということの重要性を深く認識することができた。

4-3.潮見小中校長懇談

【概要】　・日時：8/21(木)　10:00~11:00

・訪問班員：會田、大野、樫浦、倉持、小松、吉本

・内容：

・潮見小学校及び中学校の教育連携

・地域密着型の子どもの見守り体制の様子

・生徒たちの特徴と進路への傾向

・稚内市の現状とその改善案

【感想/学び】

教育を軸においた我々の仮説に対しては、潮見地区の教育機関への訪問が必要不可欠であり、我々は幼稚園から大学まですべての段階での教育施設への協力を仰いだ。そんな中、潮見が丘小学校の吉崎校長及び潮見が丘中学校の齊藤校長のお二人が合同でインタビューを受けてくださった。潮見小中学校の教員や生徒の特徴、昔の時代から現在に至るまでの遍歴、潮見地区の教育機関における連携、地域の方々との関わり、それぞれの学校における取り組み、さらには今の稚内市の課題とそれに対する意見を伺った。特にこの地区は教育機関の連携だけでなく、地域の方々との交流が首都圏とは比べ物にならないほど密であり、”地域全体で子どもたちを見守る”という姿勢は非常に印象的だった。

インタビューはお二人をそれぞれを分割して話を伺うのではなく、随時対話を含めた双方向的なものであったことに加え、吉崎校長と齊藤校長がプライベート含め仲が良かったこともあり、非常に活発であり現地の生の声として奇譚のない意見を聞けた。我々が立てた教育の仮説を支持するような意見を聞くことかできるとともに、潮見地区がいかに学術地域としてのその役割を担っているかを痛感した。最終的な我々のアクションプランとしては教育よりも観光メインであったが、そのプランの根拠やベースとして、本地区の教育的な価値や子育てのしやすいまちづくりなど、本訪問で伺ったお話が土台となり、それだけこのインタビューで伺った内容が有意義であった。

4-4.中澤和一様

【概要】　・日時：8/21(木)　11:00～12:00

・訪問班員：坂本、中島　（東地区、北地区、南地区との合同参加）

・内容：

・稚内漁業の歴史と現状

・稚内とロシアの交流の歴史と現状

・稚内の観光やその魅力について

【感想/学び】

南班が中心となってインタビューの機会を設けていたものを、潮見地区からも同行する形で参加させていただいた。

宮城県出身であった中澤さんが稚内で漁師を長いこと続けられて感じた、稚内とロシアの交友関係についてのお話を伺うことができた。稚内市はロシアのサハリン州と近く、現在は国際情勢悪化により中断してしまっているものの、盛んに交流をおこなってきた。これは、稚内市が国境の町であるからこその特徴であると思われる。また、海産物に恵まれている稚内では、漁業や水産加工産業が盛んとなっている。1977 年ごろに制定された排他的経済水域により、漁業可能範囲が 200 海里となったことで養殖業へと切り替える漁師の方もいらっしゃったが、現在も地域を支える重要な産業となっている。

中澤さんは稚内観光マイスター講師など観光ボランティアにも参加されている。稚内には、礼文島や利尻島といった島をはじめ、クロユリの群生地など豊かな自然にあふれた市であることを学ぶことができた。さらに、稚内観光マイスター検定試験の設置により、自身が住んでいる地域についてよく学び、良さを再認識できるというきっかけになるということが分かった。

4-5.産婦人科・國枝院長

【概要】　・日時：8/22(金)　15:30~16:30
・訪問班員：大野、会田、小松　(東地区、北地区、南地区との合同参加)
・内容：
・私立稚内病院産婦人科の現在の状況(職員、患者等について)
・研修医について(制度、人数、志望理由等)

【感想/学び】

子育てや妊娠・出産、医療など稚内の現状を把握するために広くお話をお伺いしたいと思い、市立稚内病院を訪問させていただいた。稚内の拠点となる病院目線での現状や研修医制度、今後の展望、少子化の実情などについて様々なことをお伺いする中で、稚内市内病院をはじめとして、稚内は医療制度が十分に整っている市であることを感じた。そのため、現在の医療水準を保っていくことが一番大切であるとおっしゃっていたことが印象的であった。また、稚内の出生数が2000年には500件であったものが、2023年には170件と約三分の一に減少しているというお話は衝撃的であった。

医療に関する話にとどまらず、生活面や人口減少等答えづらい質問にも回答していただき、とても有意義な時間となった。お忙しい中調査実施にご協力くださったことに、改めて感謝の気持ちを申し上げたい。

4-6.育英館大学職員　侘美俊輔様

【概要】　・日時：8/22(金)　9:30~10:30
・訪問班員：会田、大野、坂本、小松、倉持、中島、樫浦、永井(東班)
・内容：
・育英館大学の魅力、教育の特徴
・入学してくる生徒や稚内の子どもの特徴

・他の教育機関との連携
・卒業生の進路

【感想/学び】

稚内潮見地区には、幼保小中高大全てが揃っている。他の地区にはない大きな一つの特徴である。育英館大学は、稚内にある唯一の大学であり、1987 年、稚内地方や道北地方の住む人たちの、「道北宗谷地域に高等教育機関を」という願いのもと、稚内北星学園短期大学として設立、2000 年に全国で初めて情報メディア学部を設置し、4 年制大学に移行した。生徒数は各学年 5~20 人ほどと少なく、設置学部は情報メディア学部のみである。設立において稚内市や地域の住民の方々の支援を多くいただいた経緯から、次のような教育理念が掲げられている。
「教育基本法及び学校教育法に基づく大学の教育を行い地域社会に貢献し、『明徳』『格物致知』の精神を基盤とする人間形成の教育を行い、平和・平等・共生の心をもった人材を育成することを目的とする。」
この理念をもとにグローバルな情報化の流れに即応できる実践力と地域文化の発展に寄与する高度な学術知識を備えた人材を育成することを目指し教育を行っている。

育英館大学の魅力としては、少人数指導により、一人一人にフィットした手厚い教育を施せるところだ。また、育英館大学は稚内が本校であるが、京都にもキャンパスがあり、京都とのオンライン授業などもある。卒業生は基本的に地域や道内で就職するが、大学院進学をする場合も稀にある。

小中高大連携の取り組みとして、精神的な状態などが良くなく大学以前の学校生活が順風満帆でなかったとされる生徒について、各教育機関の関係者や地域の役職者による会議の組織があり、サポートを行い大学生活を支援しているという。

4-7.クリニックはぐ

【概要】 ・日時：8/22(木) 13:00 ~14:00

・訪問班員：坂本、小松、中島、樫浦　（東地区、南地区班との合同参加）

・内容：（潮見地区班）

・稚内市における小児医療の現状

・加速する少子化と医療人不足について

・開業医誘致制度について

・今後の医療の展望

【感想/学び】

子育て世代の生活ニーズに重きを置いた我々の仮説検証において、 およそ 12 年に渡り、稚内市における幅広い世代の医療を担っている伊坂先生にインタビューのご協力をお願いした。伊坂先生は、ご多忙なスケジュールの中、昨年度の実習に引き続き、本年度もインタビューにご協力いただいた。この場をお借りして、改めて感謝の気持ちを申し上げる。

対談を通して、稚内市の医療を支えていくためには「現状の医療水準を保つことが大切である」と力強く語られていたことが特に印象的だった。稚内市が医療過疎であるかのように思われているが、道内でも医師不足であり、東京都内で考えても医療施設単位で考えれば医師不足である。開業医誘致制度の支援金増額による医師増員を期待しても物価高騰や他の市町村でも同等の対応をしているため、キリがない。しかし、医師がいないからと言って、目の前にいる患者を前に医療を止めることはできない。限られた人材の中でどのようにして現状を支えていくかを考える必要があると言える。伊坂先生は、少子化や人口減少を受け、現在は「こどもクリニックはぐ」から「クリニックはぐ」となり、小児に限らず、様々な世代の患者を対象に診療を展開されている。地域の医療を”持続的に”支えていくためには、理想ばかりを語るのではなく、目の前の現状を受け入れ、その上で何ができるかを考えていかなければならないという先生の考えに、改めて気持ちが引き締められた。革新的なアイデアの発掘や計画の実践を続けることも大切であるが、それと同時に“今ある現状をどう活かせるか”にも目を向けることが現地の人々の暮らしに真に寄り添った支援のかたちであると実感した。

4-8.稚内市役所　企画調整課

【概要】　・日時：8/23(金)　11:00～12:00

・訪問班員：会田、大野、坂本、小松、倉持、中島、樫浦

・内容：

・稚内市の福祉、健康、子育てに関する独自の取り組み

・人口流入の促進、人口流出防止のための政策

・風力発電による財源確保の可能性

・稚内の魅力発信への取り組み

【感想/学び】

現在の稚内市全体における行政や事業について統括している、稚内市役所の企画調整課の方にインタビューに応じていただいた。

まず、稚内市独自で行っている事業について伺った。福祉に関しては、70 歳以上の方への路線バス利用料の引き下げや 1 人暮らしの高齢者向けの緊急時通告システムなど、さまざまな事業が展開されおり、これらの事業は市民への周知を徹底しており、必要な支援が提供されているとおっしゃられていた。また、子育てに関しては、市役所で子ども課が発足されてのが他の地域より早かったこともあり、高校生の医療費が無償であることや、中学生までの給食費の半額負担などが整備されていることが分かった。

私は稚内市に来てから、街に設置してある風力発電機の多さにとても驚いた。そのため、風力発電がどれほど盛んであるか、どのように活用しているかについて興味を持ち、お話を伺った。風力発電が盛んである稚内市では、市の需要の 3 倍ほどの発電ができており、これらの電力は電力会社へ売電し、ゼロカーボンを目指す北海道の取組に貢献している。そして、現在は送電設備が完全には整っておらず、エネルギーの地産地消を勧めていくことが課題であるということをご教示いただいた。これらの事業に関して、事業者の参入ポテンシャルは十分にあるものの、参入が不十分であり、市に負担がかかってしまっている現状であるということが分かった。

人口流出防止のための事業としては、街の魅力を高めて住みやすい街づくりをしていく必要があるとおっしゃられていた。そのためには、水産、酪農、風力発電に関連した魅力ある仕事を作っていくほか、冬は雪が多く降る地域であることから交通手段の確保が重要となると考えられて

いる。また、U,I,J ターンなど移住者を増やすにあたっても、取り組みが十分ではないという現状がある。そのため、今後は昔から力を入れてきた子育て支援や医療に関する事業について周知させ、移住を真剣に考えている方や子育て層をターゲットとした魅力発信を行っていく必要があるとおっしゃられていた。

インタビューをしていくなかで、街を発展させていくにあたり、市役所の方々がその第一線を担っているということを強く感じた。私たちが稚内市の現状を知るにあたり多くのことをご教示いただき、また、取材に際し予定時間を大幅に超えてしまったのにも関わらず、ご対応していただいた。この機会をお借りして、心より感謝申し上げる。

4-9.富岡幼稚園

【概要】 ・日時：8/23(金)　13:00～14:00

・訪問班員：会田、大野、坂本、小松、倉持、中島、樫浦

・内容：

・入園状況と課題

・教育環境と連携
・移住者と地域の変化
・稚内での子育て環境

【感想/学び】

稚内市の富岡幼稚園・保育園の現状を知ることができた。特に、入園状況の変化が印象的で、幼稚園よりも保育園の方が入園しやすくなっている点が目立った。女性の社会進出や少子化の影響で、幼稚園が減少し、認定保育園が増えている現状は、全国的な流れとも重なる。しかし、地域の実情に合わせた柔軟な対応が求められる中で、認定保育園の設立に向けた取り組みがあり、管轄が異なるための苦労や設備の整備に関する調整が必要だったことが伝わってきた。教育内容に関しても、文字を覚えることよりも、遊びを通じて興味を引き出し、読解力を自然に育てることを大切にしている点が、子ども中心のアプローチとして非常に有意義だと感じた。

移住者や転勤者の増加も興味深かった。特に、稚内には温泉や農業に関わる仕事をきっかけに移住する人々が増えており、その影響で地域が活性化していることが伺えた。また、教職員の不足や実習生の減少は、今後の教育環境における重要な課題であり、他の都市で実習費用を支援する制度がある中で、稚内の取り組みが不十分である点が浮き彫りになった。

稚内の育成環境において、医療費が高校生まで無料であることや、大きな公園などの自然環境が整っている点は、非常に魅力的だと感じた。親が安心して子どもを育てられる環境が整っており、地域のつながりや支援体制がしっかりしていることが育成を助けている。しかし、少子化の影響で、児童センターや学童に通う子どもが増えていることも課題として残る。

地域のつながりやイベントの重要性も感じられた。特に、幼小の連携が強く、外部講師を招いた話し合いや地域イベントが活発に行われていることは、地域全体で子どもたちを育てる意識が高いことを示している。これらの取り組みが今後、地域全体の教育環境をさらに向上させ、稚内の魅力を引き出す大きな要素となるだろう。

インタビューのあと、幼稚園・保育園施設を見学させていただいた。実際に子どもたちともコミュニケーションを取る機会もあり、「何しに来たのー」や「また遊ぼ！」といった子どもの無邪気で優しい空気感に実際に触れることができ、心温まる実習であった。

4-10.稚内市立病院（循環器内科・泌尿器科・研修医）

【概要】 ・日時：8/23(金)　15:00~17:00
・訪問班員：樫浦、倉持、坂本(東地区、北地区、南地区との合同参加)
・内容：
・稚内病院医師の出身地
・研修医の育成
・開業医誘致制度について
・今後の展望

【感想/学び】

稚内市における医療の中心である稚内市立病院に他班と合同でインタビューさせていただいた。ここでは特に、稚内の未来の医療を担っていく３名の研修医の方々へのインタビューについて掲載させていただく。

取材を行っていく中で、稚内病院では医師の方々のうち半数が稚内市外のご出身であることが分かった。それには、留学するための資格の援助や海外での実習希望が行えるという制度が整っているほか、病院全体が話しやすい雰囲気であるというような環境が整っていることが挙げられた。また、研修先として需要が高い理由としては、自身で希望する科を選べるといった研修の自由度が高いことや、大人数で研修を行う大学病院と比較すると、様々な業務に関わらせていただける機会が多く自身の実践力を身に付けられる環境であるということが挙げられた。このように稚内病院では、その特徴を生かして十分に整った環境で医療人の育成を行っていることが分かった。

また、稚内市が設けている開業医誘致制度について、将来稚内市での開業を考えているかについて伺った。自身が研修医であることから、開業するかについては現時点ではあまり考えていないという旨を聞き取ったほか、もし開業するのであればこのような制度は魅力的であることから候補の一つに入るということが挙げられた。開業するということはその土地に定住することを指すため、土地自体の魅力が重要となっていく。このことから、稚内市自体の魅力を伝えることでより制度の利用を促進できるのではないかと思われる。

今回、稚内市の医療の中心を担う若い研修医の方々に、稚内を選んだ理由を伺うことで今後の医療提供体制について必要な視点とは何かについて知ることができた。様々な質問にご丁寧に回答していただき、この場をお借りして感謝申し上げる。

4-11.稚内高等学校　衛生看護科生との懇談

【概要】・日時：8/23（金）　16:00~16:30

・訪問班員：小松、中島　（他班の看護学生 8 名との合同参加）

・内容

・授業や実習、課外活動、カリキュラムについて

・稚内高等学校衛生看護科を選んだ理由

・看護師を志したきっかけ

・卒業後の進路の傾向

【感想/学び】

昨年度に引き続き、稚内高等学校衛生看護科生 7 名と慶應義塾大学看護医療学部生 10 名がそれぞれ半分ずつのグループに分かれ、懇談形式で交流させていただいた。

全体的な印象として、早い段階で将来の具体的なイメージを持ち、明確な目標を持って学習に励んでいるという印象を受けた。看護師を志したきっかけとしては、身近な看護師の存在や幼少期の入院経験など、これまでの人生経験の中で何かしら“看護”とのつながりを契機にしている学生が多かった。また、定期試験や実習など勉学に励みながらも部活動やアルバイトとの両立に努めている学生も多かった。中学 3 年生という段階で、“看護師”という職業を選び、また勉学や課外活動に積極的に励んでいる姿に大きな感銘を受けた。卒業後の進路については、慣れ親しんだ市内や道内で基礎的な経験を積み、後に市外や道外で応用的なスキルを身につけていきたいという建設的にイメージを抱いている学生も多かった。地域とのつながりに恩恵を実感しつつも、明確な将来像を持っているからこそ、新たな場所でも経験を積み、更なるスキルを磨いていきたいという強い向上心が感じられた。稚内高等学校衛生看護科が医療を担う看護師を育成するために大きな役割を果たし、また自分なりの将来像を元に主体的に成長できる環境があることが分かった。

普段、同じ看護師を志す年の離れた学生と接する機会のない私たちにとって、今回の交流はとても有意義な経験であった。昨年度に引き続き、お忙しい中、このような場を設けていただけたこと、改めて感謝申し上げる。

4-12.山田繁春様

【概要】・日時：8/26（月）13:30~14:30

・訪問班員：坂本、小松、中島　（東地区班との合同参加）

・内容：（潮見地区班）

・風力発電の設置経緯や今後の展望

・観光事業に対する働きかけや課題

【感想/学び】

保健福祉センターの一室をお借りして、元稚内市議会議長・前富岡町内会長であり、今もなお地方議会の発展に尽力され続けている山田繁春さんにインタビューをお願いした。お忙しいスケジュールの中、我々のために時間を割いてくださったこと、この場をお借りして改めて感謝申し上げる。

私たち潮見地区班は、ここまでのインタビューを通して、稚内市の中でも潮見地区は特に、教育的基盤が出来ており、教育的支援についても充実した働きかけが行われているということを知ることができた。稚内市全体の人口流出・人口減少を抑えるための取り組みとして、教育面のアプローチに限らず、風力発電を活用した企業誘致や数ある観光資源の活用とその魅力発信といった、他方面からのアプローチについてもお話を伺いたいと考え、様々な分野からいくつかご質問をさせていただいた。

風力発電については、関連する施設の建設工事などにより継続的な経済効果はあるものの、送電設備の導入が難しく、発電により得られたエネルギー（市の需要の 3 倍ほど発電量）を活用した直接的な経済効果には至っていない現状がある。観光業については、観光サービス事業の参入や観光客を増員するための観光業者間での話し合いなど、さまざまな案は出ているが、実行までには至っていなかった。どちらについても、市に対して大きなインセンティブをもたらすポテンシャルがあるものの、参入が不十分な状態であることが分かった。

観光業者が観光客増員への働きかけを市に任せてしまう傾向があることを一つの課題点と捉えているとのお話があった。市内に住む人々が観光業の発展によるインセンティブに目を向け、その重要性に気づき、自らが主体的に動けるような働きかけが重要であると言える。市外や道外に向けて稚内の魅力を発信することも大切であるが、道内や市内の現地にクラス人々が改めて稚

内の良さを再認識できるような情報発信、場の提供が必要であると感じた。加えて、季節問わず持続的に観光客の増員が期待でき、また、『最北端』のワードだけにとらわれない、“観光地としての商品化づくり”が必要であるが、そういった動きがみられないのがこの街の弱点であるというお話があった。現水準を維持し、今ある暮らしの継続を図ることも大切であるが、時代の変化にも左右されない持続可能な生活の維持を考えた際、保守的な取り組みと同時に、より長期的で建設的なアイデアの発掘・実践も必要な取り組みであると感じた。今回の対談は、本実習の地域診断における最終的なアクションプランを作成するにあたり、大変有意義なものとなった。

4-13.稚内大谷高校

【概要】・日時：8/27(火)　13:30~14:30
・訪問班員：會田、大野、倉持、小松、中島、坂本
・内容
・観光都市としての稚内の現状と課題
・経済学的観点から見た稚内の資源活用と開発
・地域に根ざした教育の意味するところ
・高校生の進学と就職
・人口動態の現状と移住の限界
・発表に向け、稚内をしっかり「見る」こと

【感想/学び】

事前学習の段階では高校生の進路や教育の方針、先生がたが生徒にどうあってほしいと思っているかなどを質問させていただく予定であった。地域診断を進めるにつれ潮見地区には文教地区としての強みがすでにあり、完璧とまでは評価されないとしても幼小中高大教職員の先生がたの連携や連絡網が実際にあり、生徒同士が関わる機会も多くあるということを学んだ。

文教地区としての潮見地区をどう捉えるか、地域探求課という独自の課を設置した理由、高校

生の進路と希望、地域企業との関係についてお伺いするとともに、稚内の抱える人口減少という課題についてどう思われるか、大谷高校の校長を務めていらっしゃる平岡さんにお話を伺った。

インタビューさせていただいた時の私たちの方針としては情報発信が大切であるということと観光資源を活かすということしか考えていなかったが、仮に都市開発というものを行う場合は短期、中期、長期と少なくとも三つの段階でそれぞれの目標それにあった計画を立てるべきであり、今現在の稚内に足りていないものがハードであるにも関わらず、私たちの目が向いていた部分、また行政などの目が向いている部分が主にソフトであるということに気づかせていただいた。

平岡さんにインタビューさせていただき、学生の進路というものは偶然により浮動するものでありその中で地域探求科の設置により稚内市に進路を見据えた学習と経験をいち早く提供した学校であること、実際に多くの学生が地域探求科に在籍して地域に根ざした学びを得ていることを知った。ここに関して、移住という選択肢はあるとしつつも今の段階では多くの移住者は見込めないという意見と共に地域の企業は学生を求めているという実際のニーズの話をなさってくれた。

また、ハードとソフトの考え方とともに、経済学の視点から今現在の稚内ではストックが少なくフローの状態になって流れ出てしまっている資金が多いことというご指摘もいただき、私達が地域研究と考察を行う上で大変貴重なご意見を多くご教授いただいた。

インタビュー中に逆質問として君らならどうすると聞かれた際、纏まりのなかった私たちの意見に対してくださった指摘はその後の検討において抑えるべきポイントとして大いに参考になった。

私たちが実際に訪れていた季節が過ごしやすい夏であり、冬場の稚内についての考察が及んでいなかったこと、稚内の良い部分にのみ目を当てて実際の稚内というものにしっかり根を張った考え方ができていなかったこと、多くのことに気づかせていただき、地域診断を有意義に行い、そして実際に理想ではなく現実とするに値する意見を出すという部分からも学ばせていただく部分が非常に多くあり、インタビュー、対談としてとても楽しく有意義な時間を与えていただいた。

5.フィールドワークを通しての学び

潮見地区を歩いて散策し、感じたことや学んだことについてそれぞれ考察する。

＜暮らし関連＞

・建物全ての入り口や窓が二重構造になっている

→ガラスとガラスの間に空気の層を作り、外の寒さが室内に入り込まないようにすることで室内を温かく保つ工夫がされていた。私たちが 2 週間暮らしていた「少年自然の家」も玄関や窓は同じく二重構造となっていた。この二重構造のおかげで、朝の早い時間や夜の遅い時間でも室内で快適に過ごすことができた。

・公共交通機関であるバスの運行時間

→通勤・通学の時間帯を除いては、長いと 1 時間ほど次のバスを待つことも稀でなかった。車移動が主となる地域であるとはいえ、交通の弁に関してはさらに改善できる余地があるように感じられた。少し離れた距離までよりスムーズに移動ができるように、自転車を貸し出す事業である自転車シェアリングを活用してみてはどうかと感じ感じた。

・『クマ出没注意』の看板

→公園の広場の中など、至る所に設置されているのが見受けられた。どの看板も注意を引くようなデザインのものだった。看板が目に入るだけでも、熊野クマの存在を認識し、気持ちを引き締めるきっかけになると感じた。

・防犯・交通安全を呼びかける旗

→道路脇や学校の周囲に防犯や交通安全を唱える旗が乱立していた。子どもも高齢者も安心して暮らしやすい街づくりがなされていると感じた。

＜子育て・教育関連＞

・マクドナルド最北端の店舗の駐車場で夏まつりイベントの開催

→夏休みの期間に限り、夏まつりイベントとして、オリジナル風船の配布やお菓子すくいなど、子どもが楽しめるような企画が行われていた。アミューズメント施設が少ない分、子育て世代が訪れやすい場所を活用して、子どもたちの楽しみを作る工夫がされていた。

・スーパーの入り口でヨーヨーの配布

→スーパーマーケットの入り口に『ご来店したお子様にヨーヨープレゼント致しております。ご自由にお持ちください』との看板とヨーヨーの入った籠が置かれていた。小さな子どもでも楽しめるような仕掛けがあることで、年代問わず、人々がスーパーにおとず訪れる理由の一つとなっている。

＜観光関連＞
・ローソン一号店　一周年イベントの開催
→稚内市内初のセイコーマート以外のコンビニエンスストア。開店時は、全国各地からおよそ3000人の人々が来店したとのこと。現在も一周年記念イベントを開催するなど、コンビニエンスストアが一つの観光名所となっている。このように、きっかけ作りや話題づくりが出来れば、人は自然と集まってきている。

6.アクションプラン

6-1　前書き

今回私たちは稚内実習の前に東京で、潮見地区の子育てと教育に目を当てて実習を行おうと考え、その実態を知れるような場所へのインタビューを多く行った。そこから見えてきたことが私達の班のアクションプランにつながる部分が多くある。まずはその部分を紹介させていただくことから始めたい。それぞれが稚内市での活動でも述べた通りではあるが、本来私たちは稚内市の子育てと教育の面をさらにアップグレードすることによって地域を活性化するという考えの元実習をスタートした。その実習の中で今現在の稚内市での子育てについて、制度面として中学生までの給食費の半額負担、高校生までの医療費無償化、病児保育などが存在すること。環境的な面では自然が多く公園の数もあり、子どもがのびのびと過ごせる環境になっていること、人が温かく地域としてのつながりを重視していること。という、文面として書き起こせば子育てを行うにおいて良い場であると言える特徴があり、潮見地区の魅力としては文教地区としての認識がどの教育機関にもあり、学校間のネットワークがあること、各教育機関の教師が集まる会議があり綿密な連携がなされていること、さらには、稚内という地域に根差した教育がなされているという点が浮かび上がってきた。もちろん良い点ばかりではないものの、私達の提案できる改善策はおおよそ成されていて実際にうまく回っているという印象を受けた。また、フィールドワークの学びとして区画の拡充を行っている最中でありさらに開発を進めることができるという点も見えた。また、近年新しいカフェや店が増え始めているという点も見えてきた。

ここまでして良い点ばかりである一方で最大の壁になるのが人口減少であると私たちは気付かされた。そこで人口を増やすという点に注目したアクションプランを考えることにした。

稚内の実習中に感じたこととして稚内の観光資源の強さを挙げたい。自然が多く観光資源が多い。さらには第一次産業である漁業が盛んである。

そこから、私達の班は人口増加に向け観光業に目を向けることにした。

今現在の子育て環境の良さには住民の定住を促しやすいこと、家族を持ったうえで新しい商売を始めることのハードルが少し下がること、そして子育てのまち潮見というブランドを作り上げることができる可能性を秘めている。そこに対して観光業にアプローチすることで、観光を通し

て稚内の魅力に触れ、定住を考える人が出る、地域経済の活性化により商機が出るため、稚内市内で育った人が稚内の中で生計を立てることを考え始める、インフラの整備というプラスの効果を期待することができる。

さらに観光業とはしっかりとした計画のもとに行えば持続可能なものであり、雇用の創出にも大きく関係してくる。ただ観光都市としてではなく、今現在も続く漁業を通じて稚内独自の観光業となることで旅先に稚内が出る、稚内にビジネスを見出す。そんなことができるのではないかと考えた。

そこで私達の班は稚内市が出している稚内観光復興ビジョンに従う形で、一方曖昧になっている目標やそのために取り組むべき事項についてさらに詳細を詰めることでアクションプランとさせていただきたいと思う。

6-2 具体的なアクションプランの内容

『稚内の観光都市化を目指す』

地域振興とは何だろうか。街を興すことはさまざまな複合的な要素から成り立っており、一意に説明できるものではない。教育、福祉、財政、観光、産業、経済、人口…挙げていけばキリは無いが、その複合的に絡まる数多の因子の根幹部分に「人」がいると私たちは考える。特に昨今の日本で言われているのが少子高齢化であり、都市部以外の地域は漏れなく労働人口減少に頭を悩まされている。人口に関しては地方自治体が独自の政策で動くと言うよりは、国である日本政府が総括するべきなのは言うまでも無いが、自治体では一切の太刀打ちができない、というわけでは無いと思う。

結局のところ、私たちのグループが最初の仮説に挙げた「教育・子育て」に関しても、若い人が増えて労働人口が増加し街が持続的に活性化する、という考えのもと立案されたものであり、地域振興においては「人」が全体に及ぼす影響は大きい。人がいなければ新しいことにチャレンジするマンパワーや活力が不足してしまうだろう。そのような仮説をもとにインタビューを行なっていったが、ここ稚内においても人口減少は大きな課題であり、それを無視して事を成しても、結局この壁にぶち当たってしまうだろう。つまるところ人を増やすことが重要であり、いかにしてそれを実行するかが我々のアクションプランとして軸となった。

ある地域の人口を増やすためには、その地域の出生率を上げるか、他地域から人を呼び込む手法があるが、前者については複利的な考えでかなりの長期的なスパンで考える必要があり、我々素人の学生がとやかく言うよりは社会学や行動学の範疇である。後者については日本全体で減っている事実から、人口を奪い合うのかという意見について完全に反論できる自信はないが、アイデア次第では前者よりも短期的に効果が実感できるだろう。

そこで我々は他の地域から稚内へ人が流れるために、どんな案があるか模索したところ、既に

ここにある観光資源に着目した。稚内は何といっても最北の地である宗谷岬があるとともに、白い道や防波堤ドームといった資源が存在しており、もちろんそれを目当てに観光に来る人もいる。観光というものは単なる娯楽や趣味の一環である旅行に付随する事柄には留まらず、一国の重要な産業になりうるレベルで莫大な力を持ち合わせている。現にフランスは観光大国と称されるほど観光産業が活気付いており、大国の GDP の 1 割近くを担うほどである。観光には食事や宿泊、移動などといった産業が補完的に必須であり、そこには雇用が生まれる。単に観光客が落とすお金による経済効果に加え、インフラ整備や観光従事者の生活まで含め包括的な経済効果が見込める。つまるところ、稚内の観光都市化を目指し、それによる人口の増加、経済効果の増強、地域の活性化を図ることをプランとして設定した。

Step0 既存の観光名所の紹介

では、いきなり観光名勝を作って観光都市完成！という安直なものは現実的ではない。観光都市化という大それたことを述べているのは重々承知しているが、少しでも実用的なプランにするため、短期から長期までのスパンで考え、4 つのステップに分割した。

1 番初めのステップとして、既存の観光資源を通じて、稚内を周知してもらうことを定めた。単に観光地をつくるだけということは現実味が欠ける。さらには初期資金の調達が重要課題である。そこでまずは最小限の資金で最大限の効果が見込めるよう、若者とインターネットの力を借りることを提案する。Instagram や X(旧 Twitter)などの SNS の知名度は現代においては絶大な影響力があり、Youtuber などの動画プラットフォームまで含めれば、全くの無名コンテンツも一世を風靡できるレベルのトレンドにまで発展させることも容易だろう。Youtuber や SNS には Youtuber やインフルエンサーと呼ばれる、そのプラットフォームで大きな影響力を持つ人たちがいる。彼らの一部は企業や団体などからお金を支払う代わりに、商品やサービスなどといったコンテンツの紹介を行っている人もいる。コマーシャルの一つであり、インフルエンサーの影響力に応じた報酬が発生し、「案件」と呼ばれている。単に企業の広告にとどまらず、自治体などともタイアップをし観光や事業紹介を行っている動画や投稿も珍しくない。最近は、レストランや観光地などは SNS で検索して行くことも浸透しており、ソーシャルメディアが持つ影響力は計り知れない。とある小さなカフェがちょっとしたインフルエンサーの投稿から話題になり、そこから少しずつ人が訪れるようになり、口コミがさらに人を呼び有名になった、とい
うことは SNS 特有のバズ(流行る)プロセスである。

初めのアクションプランとしては、旅系 Youtuber やインフルエンサーに案件を行ってもらい、観光地稚内としての知名度を上げ、観光客の来訪を狙う。情報の発信の仕方というものは非常に重要であり、発信方法に応じて、SNS なら若者、新聞なら高齢者など、全員が全員ではないが傾向を掴んでターゲット層を絞ることができる。SNS を介した情報発信は、単に若者をターゲットにするだけではなく、彼らが持つ個人の自発的な拡散力を利用することができる。SNS は気になった投稿や記事をボタンひとつで友達や不特定多数に共有することができ、他媒体に比べて圧倒的に個人間での伝達力が大きい上に、自発的なものであるため案件のように報酬が必要ではない。

そのため、1 回の発信に対する情報の広がりは計り知れない。

インフルエンサーの 1 回の案件に対する報酬は、その人の影響力に応じて千差万別ではあるが、数十万から百万円程度が相場だそうだ。まずはそこに出資をし、知名度を上げることが重要であるため、ステップ 0 として設定した。

Step1 宗谷岬と中央商店街の再開発

ステップ 0 を経てある程度の知名度を獲得し、一定の観光客が見込めるようになれば、次のステップである既存観光資源の増強に移る。稚内の観光地として強さがあるのはやはり宗谷岬であり、その周辺はお店や白い道など、現時点でも観光地として完成はしている。そこで稚内の豊かな自然と融合させ、さらにブラッシュアップされた観光地として再開発する。近年観光地の流行は専ら食べ歩きであり、食べ歩きがあるだけ勝手に人が集まるほど人気コンテンツである。そこで宗谷岬の隣のお店街を、ホタテのバター焼きや流氷饅頭、美味しい海鮮の食べ歩きできるように改造する。後に述べる中央商店街との差別化を図るため、座ってゆっくりすることよりは食べ歩きに特化し、十数店舗の飲食店の誘致を行うとともに、歩道とゴミ処理インフラの整備が必要である。食の開発を行うとともに宿泊の整備も行いたい。近年、沖縄に完成したウミカジテラスのようにリゾート地として外見的な美しさを兼ね備えた一泊一万円から数万円の中価格帯のホテルの建設を目指す。ホテルの併設により、集客力の効率化と同時に宿泊者による食べ歩き街の朝から夜まで含めた普遍的な活性化が見込める。観光地の近くにホテルがないというのは致命的であり、それによって移動の都合からお昼にしか行けない、ということが生じる可能性が大いにあり、それを解決するとともにホテル従業員の雇用も生まれるだろう。

それに加えて、宗谷岬の近くにある白い道の再開発も行う。白い道は我々も観光に行き、確かに素晴らしい景色と綺麗な白い道で美しい観光地ではあるが、惜しい点が何個か見つかった。一つ目は宗谷岬からの距離である。車での移動は必須である上に車でも多少離れており、宗谷岬と観光地としての連続性が絶たれている。二つ目として一本道であるため景色を撮りたくて歩いていても後ろから車が通り危ない思いを何度かした。三つ目に、車のタイヤによって貝殻が粉々に砕かれてしまい、貝の跡形も無くなってしまっていた。四つ目に、海岸と夕陽が見える斜面において、道端の木が生い茂り、海が隠されてしまう点があった。これらの解決のために、白い道の宗谷岬までの延長と、歩行者天国化を行う。歩道の白い道の脇にサイクリングロード及び車道を並走させ、人と車を完全に分離させる。さらに歩行者用の白い道の途中いくつか綺麗なスポットに、いわゆる「映えスポット」として撮影用の小スペースを設け、SNS への発信を意識することが重要であると思う。青い海、白い道、赤い夕陽、緑の丘陵など、稚内がもつ雄大な自然を感じられるスポットは観光資源として非常に強力である。

これら 2 つの事業によって宗谷岬周辺を改革し、より高い完成度の観光地にすることを目指す。これに加え、宗谷だけでなく稚内市内の再開発を行い、総合的な観光産業の活性化を目指す、まず初めに行うべき場所として中央商店街に着目した。既に商店街として完成しており、大きなインフラ投資が必要でない点も優れているとともに、観光の中心となる「食」のコンテンツとして

潜在力がある。中央商店街は片側一車線で歩道には屋根が付いてる構造であり、これは神奈川県にある箱根湯本の商店街に酷似している。箱根の商店街構造を模倣として、稚内の魅力である美味しい海産物の食べ歩きができる店舗の設置が有用であると考える。宗谷の食べ歩き街との差別化として、江ノ島のような食べ歩きに加え、座って海の幸をゆっくり楽しめるようなお店の設置を提案する。既存の商店街のお店の広さを考慮しても、イートイン型の飲食店としても展開できる土地は確保されている。例えば酪農産業由来のアイスやヨーグルトの販売や海産物のレストラン、街に跋扈している鹿グッズを販売するショップなど、稚内の魅力を十分に発信できるようなお店が有用だろう。

上記のように既存の観光資源を再開発し、温故知新的に稚内の観光をブラッシュアップすることをステップ１として提案する。

Step2 自然と商いの融合

ステップ１が達成できれば、北海道内では観光地として一定の地位を確立するとともに、観光客の増加や観光産業従事者による人口の微増が見込めるだろう。さらなる加速のために、自然と商いの融合と称して、新たな観光資源の開発を目指す。

一つ目として、稚内の重要産業である漁業と手を組んで海鮮系のエンタメ施設の設立を提案する。稚内には副港市場が存在するが、我々が構想しているのは築地市場や豊洲にある千客万来などのような海鮮をテーマにしたお店が連ねるエンタメ施設である。海鮮物の郵送まで含めたショッピングもさることながら、帆立だけに特化したお店、祭りの縁日を模した内装など、東京大江戸温泉物語にも通じるような世界観での海鮮エンタメを提案する。現在の副港市場はより事業者向けの市場としての役割を持たせ、観光客向けの施設との差別化を図る。

二つ目として、若者ウケを狙った複合商業施設の設置を目指す。モデルとしては長野県の軽井沢にあるハルニレテラスのような、オシャレな和モダンをテーマとした世界観のもと、食べ歩きに限らずインテリアや雑貨、カフェなどいい意味で稚内とは直接的には関係のない発展した事業にまでの展開を行う。

三つ目としては稚内や宗谷の雄大な自然の中でのレジャー施設として、全国的に展開されているフォレストアドベンチャーをモデルとした自然系レジャースポットの開発・誘致を行う。稚内市から宗谷岬までの海岸道路付近では斜面に沿ったジップラインの設置やスキー場など、レジャーとして体を動かす娯楽施設が存在すれば、稚内の素晴らしい自然と融合し、良い相互作用を引き起こしてくれることを期待している。

Step3　日本有数の観光都市としての確立

ステップ２まで達成すれば、観光地稚内として日本有数の知名度及びそれに伴う観光客の来訪が見込めるだろう。既に観光都市化はほぼ達成できているだろうが、他の有名観光地としての差別化を図るために、さらなるブラッシュアップ案を提案する。そのためには大衆向けの観光資源

であったステップ 2 までに加えて、アッパーミドル以上の消費者を対象とした高級路線での展開は必須だろう。そこで高級リゾート施設である星野リゾートや会員制リゾートホテル事業を展開しているリゾートトラストなど、市郊外に自己完結型のリゾートホテルを誘致する。これらのホテルは所謂ホカンス目的のレジャーにも対応でき、もはやステップ 2 までの観光資源に関係がなくとも来訪者が見込まれる。しかしながら、これらの利用者は車でのチェックインが前提であるので、レンタカーの充足や交通インフラの整備が必須である。

以上のステップ 0 からステップ 3 まで短期から長期的までのプランを提案したが、そのどの段階においてもステップ 0 で述べたような SNS などを介した情報発信は常に継続的に行うべきである。

各ステップ内には述べなかったが、例えばクラウドファンディングによる資金調達や都市デザインコンテストなどを通じた一般人や企業への知名度アップが見込めるため、このようなインタラクティブなイベントを開催することも有効だろう。このような上記で挙げたステップが本当に現実的であるかは疑問であるが、少し奇抜なアイデアとしての街おこし案として記した。少しでも何かの参考になれば幸いである。

7.発表会資料

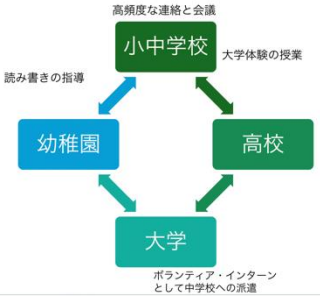
以下、発表会で使用した資料を掲載する。

潮見の魅力

①学校間の繋がり

・子供支援ネットワーク

・コミュニティスクール



潮見の魅力

②地域ぐるみで支える子育て

・子供の人数が少ないゆえに、
一人一人に合わせた細かい教育が可能

・街全体で子供を大切にする風習

例）活動が新聞に掲載される
大学生のボランティア活動

潮見の魅力

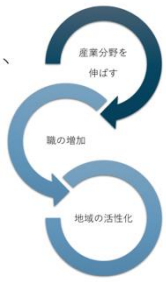
③地域に根ざした教育

・地域探求専攻科の設置
椎内観光マイスター取得@椎内大谷高校
将来椎内で活躍するために、椎内の魅力を学べる場を

・椎内の魅力を認識できる総合学習の授業
漁業・風力などの外部講師に椎内の魅力を学ぶ
職業体験の実施など

課題を解決するために、、

産業分野を伸ばす
↓
第３次産業に着目



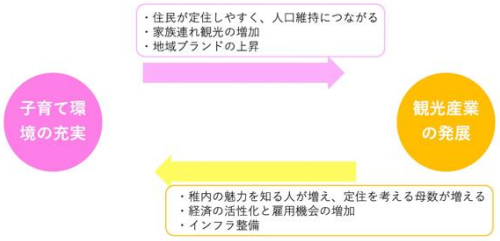
9

椎内全体の魅力

・自然や観光資源がある
・土地的余剰がある
・第一次産業が盛ん。
第三次産業も発展している。
⇒ここを生かせるのでは！？

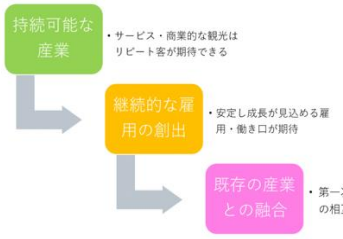
10

子育てと観光業のつながり



11

なぜ観光産業？



12

13

現在の観光に対する取り組み

・**ミッション1**
「稼ぐ」観光地への土台作り
・**ミッション2**
「おもてなし」の心を中核とした受け入れ体制づくり
方針3：観光コンテンツの磨き上げ・発掘
方針4：観光施設の基盤整備
方針5：交通基盤の整備促進
・**ミッション3**
観光客が「誘われる」地域づくり
方針7：観光情報の発信
方針8：「観光都市わっかない」の広告・プロモーション

（令和6年度版椎内市観光振興ビジョンより引用）

14

アクション
プラン

稚内の観光都市化を目指す

そのために…
インフラ基盤的な観光都市環境整備

15

アクションプラン全体像

⇒短期・中期・長期的な目標を設定し、段階的に規模の拡大を目指す

16

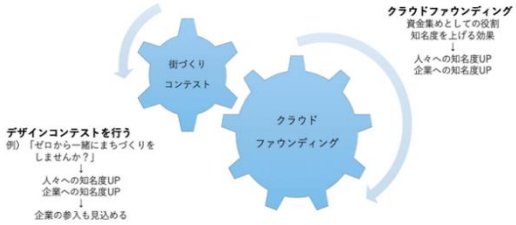
Step0 既存の観光名所の紹介

・情報発信での短期的な集客を目指す
例)旅系インフルエンサーへの案件依頼

⇒若者の自発的なSNS(Instagram、X(旧Twitter))での魅力発信を期待

17

観光都市化計画の知名度を上げるには



18

Step1
温故知新的な宗谷岬と
中央商店街の再開発

・**宗谷岬周辺**
・宗谷岬
例)**食べ歩き街**（ウミカジテラス）
中価格帯の**ホテル**

・白い道
例)既存の白い道の**歩行者天国**化
宗谷岬まで**延長**
→並走できる**自動車道**と**自転車道**を併設
"映える"写真スポットを設置

19

Step1　温故知新的な宗谷岬と中央商店街の再開発

・**中央商店街**
江の島＋箱根湯本をモデルとした**食べ歩き街**

例)豊富な漁獲量を生かした海鮮系店舗の増加
酪農事業を生かしたアイスやヨーグルトなど
乳製品の販売
鹿関連のグッズや商品を展開

⇒既存の観光地を改良することで
さらなる魅力を作る

20

Step2
自然と商いの融合

「**海鮮エンタメ施設**」

• 築地市場をモデル
稚内漁業との相互作用に期待

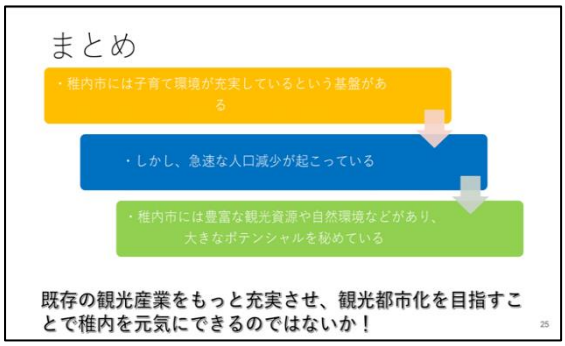
Step2
自然と商いの融合

「**複合商業施設**」

• 食べ歩きの発展、
軽井沢ハルニレテラスをモデル

Step2
自然と商いの融合
「レジャースポット」
フォレストアドベンチャー®をモデルに
・ジップライン
・キャンプ
・グランピング
21

Step3
日本有数の観光地としての確立
稚内市郊外に自己完結型リゾートホテルの誘致
星野リゾートやエクシブグループがモデル
24


まとめ
・稚内市には子育て環境が充実しているという基盤がある
・しかし、急速な人口減少が起こっている
・稚内市には豊富な観光資源や自然環境などがあり、大きなポテンシャルを秘めている
既存の観光産業をもっと充実させ、観光都市化を目指すことで稚内を元気にできるのではないか！
25

ご静聴ありがとうございました
3-1 潮見地区
26

8.コラム

8-1.稚内市観光

24 日には、稚内市役所の方々のご厚意でマイクロバスを手配してくださり、稚内市の観光案内をしていただきました。日本最北端の地である宗谷岬、世界平和や子育て平和を願う鐘のある宗谷岬平和公園、帆立の貝殻でできた白い道、氷雪の門などのモニュメントが並ぶ稚内公園、利尻山を眺められるノシャップ岬、など。大変贅沢なルートで稚内市を周らせていただきました。中でも、約 3km にわたり稚内の名産であるホタテの貝殻を敷き詰めて生まれた白い道は、白い貝殻、青い空と海、緑の草花のコントラストが素晴らしく、そのような景色を 360° 見渡せるその場所は、改めて再度訪れたいと思えるスポットであった。稚内市には、”最北端”というワードだけに限らず、まだ広く知られていない稚内ならではの”素敵な魅力”がまだまだ沢山あることを知ることができた。

お忙しい中、このような貴重な機会を作ってくださりありがとうございました。

8-2.ひかり町内会『夏まつり』

現地実習のちょうど折り返し地点となる 25 日には、町内会長である佐藤忠男様のご厚意で、みはらし会館横広場で行われた第 37 回 ひかり町内会『夏まつり』に参加させていただいた。

各種ゲーム大会やお楽しみ抽選会、南地区の幼稚園児から小中学生による南風,南中ソーランなど大変盛りだくさんのイベントであった。ゲーム大会や南中ソーランでは、私たち実習生もお客さんとして一緒に参加させていただき、我々の地元でもなかなか経験することのできない貴重な思い出となった。また、屋台のジンギスカンや帆立ラーメン、かき氷、バルーンアートの売り子としてもお手伝いをさせていただき、南地区民の方々と楽しい時間を過ごすことができた。 年齢問わず幅広い年代の方々がこのお祭りに参加され、和やかな雰囲気で交流されており、改めて稚内の人々のあたたかさを感じられた。

このような素敵な機会を与えてくださったこと、佐藤忠男町内会長含むひかり町内会の皆様、南地区民の皆様に心より感謝申し上げる。

8-3.少年自然の家でのくらし etc.

本実習では、富士見 4 丁目にある少年自然の家に宿泊させていただいた。少年自然の家では、ファシリテーターによるアイスブレイクから始まり、朝から晩まで全班それぞれがインタビュー内容の確認や共有、アクションプランなど様々な事柄について話し合った。また、他の班の班員と情報共有を行ったり、関わることができたのはこの宿泊先であったからであると思う。さらに、少年自然の家の裏にあるパターゴルフ場を利用し、稚内市の豊かな自然に触れることができた。施設の目の前にある日本最北端の温泉施設である童夢では、露天風呂で夕日が沈む瞬間を見ることができたり、地域の方に話しかけていただき交流させていただくなど、かけがえのない 2 週間を過ごすことができた。

私たちが日々を過ごす中で、快適に過ごせるようにご支援いただいた少年自然の家の職員の皆様、私たちの実習を温かく見守ってくださった周辺施設の皆様に感謝申し上げます。

8-4 潮見が丘小学校での交流授業

昨年の実習リーダーの坪田くんの交流授業が非常に評判が良かったため今年も引き継ぐ形で潮見が丘小学校で行った。参考になれば、ということで去年の坪田くんが行っている授業動画を拝見したが、後継をするのに気が引けるほど感心させられるようなものであり、かなりのプレッシャーがあってか、実は授業の前日までスライドの準備に追われていた。潮見が丘小学校での授業は本実習の中盤であり、他班が既にほかの小学校などで授業を終えていたため、授業がより良いものになるように、何に重きを置くか意見を聞いたところ、冒頭の掴みと退屈しないようなテクニックがいるということで、急遽その場でできる実験を考えて盛り込むなどの工夫を加えた。大人数の前で授業なんてものをした経験がない筆者にとって、その日の朝は緊張していたが、掴みを含め子どもたちは元気で活発に関わってくれて非常に楽しい交流となった。

我々の授業のあとには、生徒の方からお返しという形で稚内観光のおすすめスポット紹介をしていただいた。手作りのポスターに加え、みなが発表している姿に心が暖かくなり、涙腺にくるものもあった。途中の小休憩のタイミングでも、子どもたちは我々のもとに駆け寄り、活発に質問をしてくれた。小学生らしい砕けた質問から、医学部生でも頭を悩ますような難しい質問まで沢山の有意義な交流ができたと思う。

9.各参加者の学び

医学部４年 會田凱將

本実習への応募は単純におもしろそう、という興味本位に近いものであったが、振り返ってみると自らの経験として大変貴重なものであった。去年のリーダーの坪田くんと友達だったこともあるのか、最年長だったのからなのか理由はわからないが、我々のグループだけではなく、実習全体のリーダーを務めた。個人的にはあまりリーダー役を買って出た経験は少なく、右も左もわからない初めての地域での実習を仕切るのは苦労したが、チャレンジ精神やリーダーシップなど、将来医師としても必須となるようなスキルの習得の糧となった。稚内という都会の喧騒から離れた過ごしやすい自然と気候の中、様々な方との交流があった本活動は私個人にとっても有意義で充実したものだった。

医学部４年 大野杏花里

日本最北端の地、という響きに興味を抱き、稚内市について知識のないまま申し込んだ本実習であったが、実際に足を踏み入れてみて、直接人の温かさや広大な自然を肌で感じられた２週間はとても貴重な経験であり、参加してとても良かったと感じている。当たり前のように鹿が道路を横断し、人生で１番の満点の星空が見え、山に囲まれた空気の綺麗な地で過ごし、観光地にも連れて行っていただいた中で、実習に参加する前には知らなかった稚内の魅力を沢山発見した。インタビューをさせていただく中でも、稚内に住んでいる方の地元愛を感じる場面や、私たちに気さくに話しかけてくださることがあり、地域全体に迎え入れていただいているような気持ちになった。これらのような人を惹きつける魅了を持つ稚内が今後発展していける可能性を私は多く見出すことができ、また訪れたいと思った。

医学部３年 倉持裕基

最北端の地稚内か。行ってみたいな。そのくらい今から考えれば些か半端で不純な動機で今回私は三学部合同実習に参加を決めた。実際実習が始まってみて、内実としては自身が想定していた以上に多くの知見を得ることができたと感じている。例えば医療に関係する話で一つ挙げるのであれば一つの市内に病院が数えるほどしかないなんていうことを東京で生活している時に想像することができようか。近くのクリニックに向かうのに車を使うなんていうことを想像しうるだろうか。例えば自分が学校へ通学する道中だけであっても大きな病院が２つとその他のクリニックや医院においては数え切れないくらいある。同じ区域に住んでいても向かう病院は異なる。だが稚内はどうだろうか。医療に関するそんなことは当然の事実である。病院は数えるほどしかないし車で向かうのも当然である。人口が少ないから一つの病院の受け入れも少ないだろうという観測でいた自身だが、実際に向かって話を聞いて考えることは全く異なった。まずは何よりも診療科が全て揃っているわけではないのだ。次に近い病院は４時間かかる。少ない病院数で少な

い医師数で３万人の命を見る。医師を呼びたくともどこも医師不足。医療は疲弊する。東京にいるだけでは感じることのできない地方医療というものの実態をまざまざと見ることとなった。もちろん色々な医師にかかってよくわからない薬を飲むというような事態が防げるし、つながりを持って対処できるといういい点もある。だがそれでも、足りないものがあると感じた。医療もサービス業であるし、商業なので商機のない場所に医療が広がることは難しい。だからと言って最北端の街稚内に商機が出るためには何があるのか。観光資源の多さから人を呼び、人が多いからこそ医療が入り込めるようにするのがいいのではないかと考えた。人が先か医師が先かで私たちは人を選んだわけである。今ある観光資源をまずは発信し、情報としての稚内を広めること。その力による観光業の賑わいをとどまらせずさらに観光都市として区画の開発と更なる資源の獲得に力を入れること。私たちのアクションプランは医療系の三学部が出すものとしては少しコンセプトも異なり、もしかしたら求められていないものなのかもしれない。たったの２週間かもしれない、過ごしやすい夏だけを体験したかもしれない、だがそれでも、実際に稚内に向い、そこで地域を見て出した荒削りで粗末なものかもしれないが医療だけでなく地域が元気になるための案である。僕らのそんな活動が何かしらの良い結果を産んでくれる、もしくは誰かの目に留まり、いつか実ることを願う。

医学部１年 樫浦ももこ

私が今回の実習に参加したのは、本州最北の地である稚内に足を運んで、市民の方がどのように生活しているのか知りたいと思ったのが第一である。医療の面でも、祖父が地域医療に近いような開業医であったため、地域医療にもものすごく興味があった。稚内は気候がとても涼しかったが、人々は本当に暖かく迎えてくださり、おかげさまで実りある実習となったことに非常にありがたく思う。

私は、今回の実習に参加して、地域の社会の維持や向上の難しさを感じるとともに、稚内はもちろん、全国様々な市町村の生活に関して、多様な視点から課題を明らかにし、少しでも早く解決に向けて動き出す大切さを学んだ。

また、今回の実習はインタビューを中心に行ったが、実際に現場の声を聞くことの大切さを身に沁みて感じた。今回実習にあたって、インターネットを中心に稚内に関する情報を調べたが、情報は少なく、正確性は怪しく、実感も湧かないものだった。しかし実際足を運んで耳にする生きた言葉は、稚内の課題を考えていくのに大きな手掛かりとなり、百聞は一見に如かず、を身をもって学んだ。

本実習で稚内市の子育てや教育について学んだが、様々な人が教育機関横断的に積極的な繋がりを持つ努力をしていたり、情報を共有することで、誰も取り残さずに、卒業後までサポートするような体制が敷かれていて素晴らしいと感じた。

今回、教育面や生活面、健康面や病院の様子など、様々な視点から稚内市を考えたことで、将来自分が医師になる上でも、患者や患者の属するコミュニティ、社会に対して多様な面に目を向けて問題点を適切に把握することで治療をより良いものにしていきたいと思った。

薬学部４年 坂本麻央

私は本実習を通して、地域に目を向けることの大切さを学んだ。私が実習に参加した理由は、今までほぼ関東圏でしか生活をしたことがなく、他の地域に住まれている方の生活について興味を持ったからである。事前準備の段階から稚内市について調べていたものの、ネット上での情報しかないゆえに情報収集の限界をあることを学んだ。そして同時に現地に足を運び、多くの方にインタビューをして話を伺うことでしか知ることができないものもあるということを学んだ。今後、薬局や病院での実習をさせていただく中で、紙での患者に関する情報だけでなく、患者本人向き合うことで得られることもあるということを心に留めて、薬剤師としてできることは何か考え実践したいと思う。

また、私は今まで自ら進んでこのような機会に参加することがなく、現地に行く前は不安に感じていた部分もあった。しかし、実際に現地へ行ってみると市民の方々の温かさに触れたことや、班員との交流で最終日を迎えることが寂しく思えるほどになっていた。本実習は、多くの方のご厚意とご協力あってのものであると強く感じている。このような機会を経験させていただけたこと、多くのことを学ばせていただいたことに深く感謝し、今後社会に役立てるような存在になれるよう尽力していきたいと思う。

看護医療学部４年 小松帆香

私は、本実習を通して、現場の”声”に耳を傾けることの大切さを改めて実感した。稚内に２週間滞在し、現地で暮らしを営む方々との対話を重ねる中で、事前学習では知ることのできなかった地域の実状を聞くことができた。“地域を診る”とは、単にその地域の情報収集をすることではなく、実際にその地域に赴き、人々の暮らしを知り、人々との交流を重ねることで、ようやく“地域を診る”ことの始めの段階に立つことができるのだと感じた。見かけの情報やデータに囚われず、その根源にある実状はどのようであるのか。当事者となる対象は実際にどのようにその実情を捉えているのか。を理解しようと関わり続けることが重要であると感じたとともに、その関わりは自身の知見を広げる大きなきっかけとなった。現代は、さまざまな情報が簡単に手に入ってしまう情報社会であるが、自らの主体的な行動や経験により得られた知見こそ、今後大切にすべき情報、学びであると実感した。

また、この経験を来年度からの臨床現場における”個別性を尊重した”看護の実践に役立てていきたい。医療という分野において、看護師は数ある医療者の中でも対象となる患者と最も距離の近い存在となる。患者にとっての痛みや苦しみは、本人にしか分かり得ないものであるが、どんな時も患者の声に耳を傾け、気持ちを分かち合い、患者を１人の”人”として理解しようとし続けられる看護師でありたい。そして、私自身も１人の”人”として、自身の知見を広げるため、主体的に行動し続けられる存在でありたい。

『学生のうちにしか出来ないことに挑戦したい』という動機から参加を決めた実習であったが、本当に多くの経験と学びを得ることができた。改めて、本実習に携わってくださった全ての皆様に感謝申し上げる。

看護医療学部２年 中島明音

今回の稚内での三学部合同実習は、私にとって非常に貴重な経験となった。当初は「最北端の地に行ってみたい」という興味本位の動機で参加を決めたものの、実際に参加してみると、期待以上の学びと発見が得られる充実した２週間となった。特に、稚内の自然環境と地域の方々の温かさは、印象的で忘れられないものとなった。日常では目にしない鹿が道路を横断する姿や、満点の星空、北海道の大自然や澄んだ空気に囲まれての生活は、都会では体験できない新鮮さがあった。また、地域の方々との交流を通じて感じた地元への愛や、稚内の魅力を教えていただいたことで、この地の持つ可能性を強く感じた。

医療の観点からは、地域医療の現状に直面したことが大きな学びである。診療科が限られている医療体制や、隣町の病院まで車で４時間もかかるという現実は、東京での生活では想像もできないものであった。その中で、医療者が限られた資源を駆使して地域の命を支えている姿に感銘を受けると同時に、人口減少地域での医療の課題を考えるきっかけとなった。また、現場でのインタビューを通じて、地域の方々の「生の声」に触れることの大切さを改めて実感した。インターネットやデータからは得られない現場のリアルな状況を肌で感じることで、課題に向き合う具体的な手がかりを得られることを学んだ。今回の実習の中で、地域全体を見渡し、社会的な課題と向き合いながら、自分たちができることを考えた経験は、今後の臨床現場でも必ず役立つものとなると感じた。この経験を忘れず、さらに学びを深めていきたいと考えている。この経験を糧に、将来医療や社会に貢献できる存在を目指して努力を続けていきたい。

10.ご協力いただいた機関・団体・個人様へ

本実習において、グループでの活動開始から現地での実習を通して、さまざまなサポートをしてくださった看護医療学部 4 年 吉本ひなさんをはじめとするファシリテーターの皆さま、丁寧なご指導ご鞭撻を賜りました、本学医学部医学教育統轄センター春田淳志教授に深く感謝の意を表します。また、稚内市での活動をあたたかく見守ってくださった本学薬学部薬学教育研究センター石川さと子教授、医療薬学・社会連携センター中村智徳教授、医療薬学・社会連携センター社会薬学部門岩田紘樹専任講師、看護医療学部健康マネジメント研究科健康マネジメント研究科委員大阪和可子准教授に感謝の意を表します。

また、現地での調査実施を遂行するにあたり、お忙しい中大変多くの方々にご協力をいただきましたこと、深く感謝申し上げます。皆様のご協力のおかげで今回の実習での経験がより有意義なものとなりました。本実習での学びをこれからの学生生活や臨床の場に活かしてまいります。

次項にスケジュールの順にご協力頂いた皆様のお名前を記載致します。

宗谷友の会会長　飯田光様
潮見友の会　植木明彦様　吉田勝徳様
稚内市長　工藤広様
今村光壹様
稚内私立潮見が丘小学校校長　吉崎健一様
稚内市立潮見が丘中学校校長　齋藤康輔様
中澤和一様
稚内市立病院　産婦人科の皆様
育英館大学　侘美俊輔様
クリニックはぐ院長　伊坂雅行様
稚内市役所　企画調整課の皆様
富岡幼稚園の皆様
稚内市立病院　循環器内科・泌尿器科・研修医の皆様
稚内高等学校　衛生看護科の皆様
ひかり町内会の皆様
山田繁春様
稚内大谷高校校長　平岡祥孝様